

# カタルシスを語る(前編)

福島淳 イラスト・福島マルゲリータ



によく用いられる「ヒステリー」といっ

た意味とはちがう。キーキー、イライラと人にあたる状態を指した用語ではないのだ。ヒステリーという言葉は、そもそも「子宮」を意味するギリシヤ語から生まれた。

それを元に長い医学の歴史の中で、その時々々の医学思想を反映した疾病観によりさまざまに理解されてきた。

世界保健機関(WHO)の国際疾病分類第10改訂版-ICD-9(International Classification of Mental and Behavioural Disorders)においては、転換性障害(体の症状、例えば運動機能の障害、感覚障害など)と解離性障害(健忘、意識障害、多重人格など)とに分けて呼ばれている。

ここでフロイトは、転換性障害の方に言及しているようだ。その原因は心因性であり、心理的、心的外傷的な出来事、解決しがたく耐えがたい問題、あるいはうまくいかない人間関係と、時期的に密接に関連していると考えられる。

このような体験を受けた人の中には、あまりに耐えがたいために意識から追いつき、無意識下に封じ込めておくことで心の防衛メカニズム(防衛機制)が働く。

そのメカニズム自体も、意識してそうなるのではなく無意識的に働く。決して意識的な抑圧(suppression)ではない。これを「抑圧(repression)」とよぶ。

意識下に抑圧されたものはけっして消滅せず、無意識内でそのエネルギーを保ち、身体(転換性)症状ないしは解離症状

として形を変えて現れてくる。

「抑圧」を、フロイトは全ての神経症的な防衛機制の前提と考えた。精神分析の歴史そのもの、といてもいいかもしれない。

抑圧には、最初に受け入れがたい感情を無意識から無意識に追い出す動きと、再びそれらの無意識の内容が意識に侵入するのを防ぐ動きが、含まれている。

常に抑圧されるべき無意識的な内容が、たえず意識に侵入しようとしている場合には、なにか壁のようなものを作らざるを得ない。その壁は、具体的に言いつつ、過度な習癖といった形で現れることもある。

例えば、ただの癖を超えて、目立ったことを繰り返してしまったり、貧乏ゆすりや「爪噛み」、または対人関係における「感謝無礼に近い丁寧さ」とかに代表される。

フロイトは、無意識下に抑圧されたものが、精神分析の自由連想法(なんでも頭に浮かんだまま話すのを傾聴する)により、意識化されたり、再現されたりすることで、心の緊張が開放され(これを除反応という)身体症状も消失する、と説明したわけだ。

現実には、抑圧の緩和を試みる過程で抵抗が現れる。この抵抗の解決を通じて抑圧が緩和され、無意識の内容の意識化が可能となり、症状が消失していく。

後編では、悲劇映画を例にとり、ボクナりの感想を交え、「カタルシス」についてさらに掘り下げてみよう。

「カタルシス」という言葉を耳にしたことがあるだろうか。わずかながらメディアの中で聞くこともあるようだ。カタルシス(catharsis)とは、現代標準国語辞典(学研研究社)によると、「目こぼるなやみ、苦しみや人を話したりすることによって、気持ちをすっきりさせること」である。

元来いつ、どこで使われた言葉か調べてみると、古代ギリシヤ語で医学用語、katharsisに行き着く。薬剤を用いて吐瀉や下痢を起させて、体内にたまった汚物を体外に排出し体内を浄化することである。

つまり、カタルシスは単なる生理学的な意味で使われていた言葉で、「浄化」と翻訳できる。

それをアリストテレスが「詩学(Poietique)(前330頃)において、心理学用語として初めて適用した。彼は、悲劇が観衆に及ぼす影響を説明する際に用いたのだ。

「悲劇とは、まじめで厳肅な、完結している行為の模倣であり、それはいたまじさと恐れをつづけて、これらの諸感情の浄化を達成していく」。

つまりギリシヤ悲劇を観客が好むのは、悲劇を見ることにより、自分の心が浄化されるからだと言明する。悲劇を見るうち、主人公に自分を投影し同一化する動きにより、主人公の心の動きをあたかも自分のことのように一言一憂するのが、なんらかの浄化作用をもつ、という意味で用いたのだ。

言い換えれば、悲劇を鑑賞することによって、観客が悲劇の主人公のパトス(pathos: 苦しみ)の感情を共に体験し、最後にはこれらの感情から開放されることである。この動きをカタルシス、浄化作用と呼ぶのだ。

なぜ、鑑賞するにも悲しく辛い悲劇が求められるのか。それは自分自身の悲しみや葛藤が軽減されるから、といえるだろう。多分、そういった感情の強い人たちは悲劇を求め、それを鑑賞し、共有することで癒されるのだ。

元来、こういった意味を持つ「カタルシス」であるが、それにさらに心理学的、精神医学的な意味を持たせたのが、フロイトとフロイトである。

彼らは著作「ヒステリー研究」で、放出されなかつた情動は、無意識下に閉じ込められたままになって病的影響を与え、と説明した。当初、フロイトは催眠療法をヒステリー患者に行い、心の風通しをよくする浄化法と呼んでいた。フロイトは、そこから更に精神分析を展開していく。彼は著作「精神分析」で述べている。

「ヒステリー」症状は、ある心的過程のエネルギーが意識的操作にまで到達できず、身体的神経支配へ移動する(転換)時に生まれると考えられる。治療は横道にそれた情動が開放され、正常な道をおって放出されること(除反応) カタルシス(カタルシス)である。

ここで、もうひとつ説明しておくが、「ヒステリー」とは医学的には、世間一般

## 読者の皆さんへ

私は「悲劇」と聞いて「悲喜劇」を思い出してしまいました。

それは、作家の筒井康隆氏が入浴中浴槽の栓を抜き、その水流に陰のつが排水口に引きこまれて殺さなうなったという実話です。

ご本人もエッセイに「悲喜劇」と称しておられます。以来、私は「悲劇」と書いてもこれが浮かぶのでございます。あしからず...



マルゲリータ